雜纂

カチガラについて

駒井義明

西紀百四十年頃を中心として（卽ち後漢時代に）生存せるエヂプトのアレキサンドリアの數學者・天文學者・地理學者として有名なる Claudius Ptolemaeus の著書に東方に關する八卷の地理書あり。中に、此地理書の最東方なるシナイ國と關聯してカチガラなる港ありて、その位置、後漢時代西方人の東方に關する地理的知識の範圍を定むるものとして早くより問題となれり。

さて此のカチガラが今日の何れの地なるかにつきては洋人の解釋を施せる者甚多く從って又異說紛々たるものあれど皆穩ならざるが如し。これ別にこゝに愚說をたつる所以なり。

さて、佛人 George Coedès 氏はその著 Textes d'auteurs grecs et latins relatifs a l'exctrême-orient に於てプトレミイ地理書を佛譯せしが、今之により新にカチガラ港の位置を考定せん。今此書のプトレミイ原文譯中よりカチガラ港に關する譯文を示せば次の如し。

P. 38 Marinos ne rapporte pas le nombre de stades que comporte la traversée de la chersonèse d'or ?

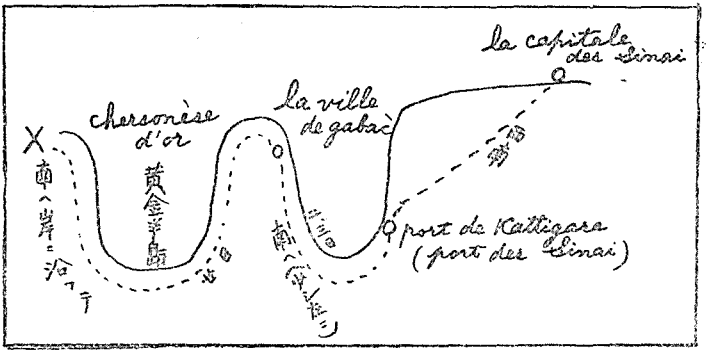
Kattigara; mais il dit qu' Alexandre a écrit qu' à partir de la (chersonèse terre fait face au sud, et qu' en naviguant le long de cette terre, on atteint en 20 jours la ville de Zabai; puis, qu' en se dirigeant de Zabai vers la sud et plutôt un peu sur la gauche, on atteint, en un «certain nombre» de jours, Kattigara.

p. 41……, car la traversée (de Zabai à Kattigara) se fait dans la direction du sud-est.

P. 49……; (ils [Marinos] ajoutent)) que la route de la capital des Sinai au port de Kattigara est orientée vers le sud-ouest, ……なり。

以上の譯文述ぶる所を圖示するに下の如し。

さてゲリニ Gerini 氏はその著 Researchs on Ptolemy's Geography に於て黄金半島を馬來半島に、又バザイを西貢の西北トーペイ町 Tó-pei（氏の著書二一八頁）に比定せり。この比定は正鵠を得たる如く、馬來半島の東なるシャム灣は支那にては金鄰大灣と稱へらる（通典に見ゆ）。此等の諸比定を前提として今コエード氏の佛譯プトレミイにつき考ふるにシナイ卽ち南部支那に於て後漢時代その首府と呼ばるゝは、明に今日の廣東卽ち秦漢以後の南海郡たり。故にその西南にありてふカチガラは方向上今日の佛領安南の沿岸に求めらるべきは蓋し動し難きが如し。



次に注意すべきは後漢書より見ゆるなるが某郡徼外某國として外國名を記せる事に

て、これは某郡を經て某國が朝貢するとの意味にて例へば永昌徼外撣國と云はゞ永昌郡に至り朝貢する撣國の意味なり。かく考ふる時後漢書本紀或は南蠻傳等に例多きは、多くの南蠻の朝貢の事實を傳へたる際に殆皆日南徼外某蠻と記せる事にて之南方の諸蠻が皆日南郡を經て朝貢せる事實を示せるなり。今晉書南蠻傳を見るに林邑條に王范文の叛亂の原因を敍せし所に初(日南)徼外諸國、嘗齎寶物自海路來、貿二貨賄一、而交州刺史・日南太守多貪利侵侮、十折二三一、……とあるは日南郡が南蠻諸國の通貢の入口にて、州郡の役人が利を貪るほど所謂通貢(實質は卽貿易)の繁盛なるを語れり交州刺史とあるは日南郡太守が交州刺史の下に立てる故にて、日南郡の事を主として指せるは明かなり。以上の如く日南郡が通貢の入口たるは、當時の南方交通が海上にて又南蠻諸國は多く海によらざれば支那に來りえざる故港を意味するなり。

さて後漢時代の日南郡(治西捲縣)の大鞠の位置は今日の安南順化なる故、後漢時代の南蠻諸國の來りしは順化地方なること知らるゝなり。(唐代外國に知られし Pi-King 卽ち比景は漢代より日南郡下の一縣にてこれは今日の安南の廣南地方なり)

さて前述の如くプトレミイのカチガラは後漢時代に於ける廣東の西南なる海港なること及び後漢時代に南蠻の來朝は主として日南郡(治西捲縣・土名區粟城)にてその位置又廣東の西南なることを併考せば此兩者が同一地點ならんとは蓋し後漢時代當方面の大勢上妥當ならん。故に愚生は此兩者を同一地點と考へんとするなり。

次に此の後漢時代の日南郡治なる西捲縣の土名は水經注溫水條により知らるゝ如く區粟城(他書に區粟城とあるは非なり)なるが區粟なる支那名稱は土音を寫せるは論なかるべし。さてカチガラなる語については、愚考するに區粟城なる土名の

音寫たるべし。此の語について Chinesische Studien zur Geschichte des antiken Orient-handels Bd I に於て Hirth は二一頁に Kattigara 及び gara の二部分より成立すと云ひたれど何語なるやは不明とせり。されど思ふに gara は skr. の city を意味する nagara の略にて Kattigara は漢字區粟にてあらはされたる土音を寫せしなるべし。愚生はしか信ずるなり。然らば漢字區粟を以てあらはされし土言の意味如何。

區粟は區及び粟の二部分に分つべく粟は占語（チャム）（卽ち林邑語）dhuk ならん Aymonier et Cabaton 合著の占佛字書によるに占語 dhuk に注して Terre artificiel と云へり。卽ち人工の丘の義なれば蓋し土にて高く丘狀にきづける城寨の義なるべし區は占語 ku にて Khmer の義なり。卽ち林邑人がクメール人を呼ぶ名稱なり。故に區粟は卽ちクメール人の丘城の義なるべし。之につき考へらるは後漢書南蠻傳等に見ゆる林邑の始祖區連にてその姓區も亦蓋しクメール人の出なればなるべし思ふに區粟城なる後漢時代の日南郡治たる西捲縣（或は卷に作る）の土名は前漢武帝時代の漢人置縣以前、此地にクメール人（太古雲南方面より南下せりと思はるゝ）が丘城をきづきしにより土人チャム人卽ち林邑人（南方より來れる）がクメール人の丘としてよべるによれるならん。愚生はしか信ずるなり。此地が形勝なれば漢人又置縣せしなるべし。區粟城の結構につきては水經注溫水城に詳說されたり。

要之にプトレミイのカチガラは後漢時代の日南郡（治西卷縣）＝現今の安南順化にて、その土名 Kudhuk-nagara 卽ち「クメール人の丘」を漢人寫して區粟城とし洋人うつして Kattigara とせしなるべし。愚生はしか信ずるなり。

故にカチガラを或は河內に或は廣東に或は杭州

に甚しきはボルネオ其他に求めんとする古人先輩の說は遺憾ながら從ひ難きが如し。

後記

此の小篇は一昨大正十五年十一月頃に稿成りその十二月東大卒業論文中に一部分として提出せしものなり。恩師藤田博士は昨昭和二年史學大會に於て「葉調・斯調・私訶條につきて」なる講演中に於て又カチガラ順化說を說かれしも、愚生は博士と別個の考證によれり。是茲に更に此一文を草する所以なり。

（大正十五年十一月稿昭和三年十一月再錄）